

〈論文〉

ロバート・ブラウニングと強い男

甲 元 洋 子

Abstract

This thesis deals with three works by Robert Browning: “Child Roland to the Dark Tower Came” (1853), “Prospice” (1861) and “Epilogue” (1889). These poems are common in their describing strong men. Child Roland wanders in a desolate wasteland through many weird obstructions to die in vain. Though piteous, the stoicism of Roland’s action and mentality is splendid enough to captivate us. Here Browning shows his ideal image of a strong man who strives to attain his self-imposed noble goal, even in a very difficult condition. Soon after the death of his beloved wife, Browning wrote “Prospice,” in which he thinks about his last moments and shows his brave resolution to fight against Death thoroughly as a strong man. At the same time, the poem speaks out the poet’s determination to spend his remnant days fully and lively. He lived up to his resolution. The sense of loss of his wife did not overwhelm him. Before his death, Browning wrote “Epilogue” and summarized his life as one of a strong man. In this poem, his soul, wandering down the streets in broad daylight, demands his friends to cheer him to fight on. Browning was a brilliant, strong man while living and is so in the other world, too.

はじめに

ヴィクトリア朝の大詩人、ロバート・ブラウニング (Robert Browning, 1812-89以下「ブラウニング」とする) は、1853年1月に “Child Roland to the Dark Tower Came” (「貴公子ローランド暗黒の塔に来た」以下「貴

公子ローランド」とする)を書いた。結婚(1846年)以来、創作が滞っていたブラウニングの活動再開を示す作品であった。ここに至るまでのブラウニングと妻のエリザベス(Elizabeth Barrett Browning, 1806-61)の行状をMartin Garrettの*A Browning Chronology*を参考にしてまとめてみよう。

ブラウニングが手紙のやり取りを経て初めてエリザベス本人と会ったのが1845年5月。ブラウニングは33歳、エリザベスは39歳であった。たちまち恋に落ちた二人は、翌1846年9月12日、St Marylebone Churchにて秘密裏に結婚し、1週間後に英国から出奔した。エリザベスの父親を説得して結婚を認めさせることは不可能であった。一行(ブラウニング夫妻、エリザベスの愛犬と女中)は船や汽車、馬車を乗り継ぎ、約1か月かけて10月半ばにイタリアのピサに到着。ここで冬を越して1847年の晩春にフローレンスに落ち着いた。これ以降、エリザベスが死去する1861年まで、この町が彼らの主たる居所であった。

環境の変化で健康状態も改善したエリザベスは2度の流産(1847年と1848年)を経て、1849年3月、無事に男児を出産した。同年7月には夫への熱烈な愛を綴ったソネット連作集、*Sonnets from the Portuguese*を上梓している。また翌1850年6月にはワーズワス(William Wordsworth, 1770-1850)の後任として、史上初の女性桂冠詩人の候補に名前が挙がる¹等、公私ともに充実した日々を過ごしていた。

1851年5月、ブラウニング一家はフローレンスを離れ、6月にパリに入り、7月にロンドンに移る。翌1852年10月にロンドンを離れるまでの1年余の間、ブラウニング夫妻はロンドンやパリで、カーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)、ロセッティ(Dante Gabriel Rossetti, 1828-82)、テニスン(Alfred Tennyson, 1809-92)、フランスの女流作家、ジョルジュ・サンド(George Sand, 1804-76)等の文人たちとの交流を楽しんだ。

しかし良い事ばかりではなかった。ロンドンに着いてすぐブラウニング夫妻はバレット氏(Edward Moulton Barrett, 1785-1857)に和解を求めて

手紙を出したのだがこれは無慈悲にも受け取りを拒絶された。エリザベスがイタリアから父親に書き送った手紙も全て未開封の儘で一緒に返却されてくるという徹底ぶりであった。1852年2月、ブラウニングはシェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) の『書簡集』出版に際し、序文となるエッセーを書いたが、手紙が偽造文書であることが判明し出版は取り止めとなった。同年7月には、ブラウニングの父親 (1849年に妻を亡くしている) が某未亡人に対する婚約不履行と名誉棄損で訴えられた。この醜聞はブラウニングにかなりの “pain and embarrassment” (90) をもたらした。

ブラウニング一家がロンドンとパリでの生活を終えてイタリアに戻ったのは1852年の11月。翌1853年の年頭にブラウニングは「廃墟の恋」 (“Love among Ruins”)、「女と薔薇」 (“Women and Roses”)そして「貴公子ローランド」の三篇の詩を書いたのであった。

作品概要

「貴公子ローランド」は34の連 (各6行)、204行から成る “monologue” (独白) の形式になっており、1855年出版の詩集『男と女』 (*Men and Women*) に収められている。登場人物はローランドただ一人で、黄昏の薄暗がりの下、彼が黙々と歩みを進め最期を迎えるまでが、淡々と正面切って描かれているだけである。

まずは作品の内容を見てゆきたい。ブラウニングは詩のタイトルの下にカッコ付きで “See Edgar’s Song in ‘Lear’” と記している。シェイクスピア (William Shakespeare 1564-1616) の『リア王』 (*King Lear*) の中に、狂人を装ったエドガーが “Child Rowland to the dark tower came”²と歌うシーンがあり、その歌詞をブラウニングは自分の詩のタイトルとして使ったのである。『リア王』においてエドガーは、この後に続けて “Fie, foh, and fum, I smell the blood of a British man.” と歌う。Peter Milward の説明によると、これは「民話 *Jack the Giant Killer* に出てく

る巨人の言葉」(175)だそうである。ただ、「貴公子ローランド」と民話『ジャックと豆の木』については関連性は薄く、先行研究でも殆ど論じられていない。拙論においても両者に直接の関係はないと見て考察していない。寧ろ私は、Harold Bloom の、ブラウニングの詩はエドガーの歌その物よりも、それに先立って述べられているエドガーの苦勞話の内容と関わっているという考え方(44)を採りたい。エドガーが舐めてきた辛酸は、ローランドがこれから語ろうとする自身のひどい旅の内容と符合するからである。

さて、語り手ローランドは、目下「暗黒の塔」(“Dark Tower”)を見つける旅の途上にある。この「暗黒の塔」とは何であり、なぜこれを見つけ出さねばならぬのか、については全く説明されない。ともかくも「暗黒の塔」を見つけることが最重要事項なのである。これまでも騎士による探索隊が編成されたが悉く失敗した。ローランドも世界中を経巡って探し続けているが未だ目的を達成できていない。彼の疲労は極まり、希望は潰えて気力も衰えている。「待ち伏せて、道を尋ねる旅人を畏にかけ…髑髏のような顔で笑う男」(8-10)³の指示に従ってローランドが「不吉な道」(14)へと方向を変えたのは、そうすればこの辛い旅に終止符が打てると思ったからだ。

以下、ローランドが辿った行程をなぞってみる。今、時刻は「侘しいとしか言いようのない一日」(46)の暮れ方である。雲間から漏れる残照は「彷徨う者が平原に捕らえるのを見ようとする赤い流し目」(47-48)のようだ。案の定、ローランドは謎の男に嵌められたことを知る。先ほどまで歩んできた「安全な道は消えてなくなり、あるのは見渡す限り灰色の平原」(52)で、これから後はそこを進んで行くしかない。

風景は殺気立っている。「こんなにも飢えた自然を見るのは初めてだ」(55-56)、「欠乏と不活性と渋面がその土地の相続分だった」(60-61)とローランドは言う。妬まれて「頭をぶち切られ」(68)、茎だけになったアザミ。ボロボロになった「イタドリの鋭い黒い葉」(69)。目に入る物がどれも皆「非情な獣に踏みしだかれたような」(72)状態で気が滅入る。「ライ病患者の髪

のように疎らで、細く干からびた葉が、血と一緒に捏ねたように見える泥に突き刺さっている」(73-75)。その中に一匹の「硬直した盲目の痩せ馬が…茫然と立って」(76-77)いて、「死んだまま、瘤のある赤い首を伸ばし、錆び色のタテガミに隠された目を閉じている」(80-81)。

あまりに凄惨な眺めに思わずローランドは目を瞑り、心の中にある「昔のもっと幸せな光景の下絵」(87)を眺めて心を立て直そうとする。ちょうど「戦う前に景気付けの一杯を欲するように」(86)。しかし実際には、信頼していた仲間裏切られた苦い過去が蘇ってくるだけだった。堅い友情で結ばれていた“Cuthbert”(91)には「ある夜の恥ずべき行為」(95)があった。また名誉を重んじる誠実な騎士“Giles”(97)は「卑怯な反逆者」(102)に墮してしまっただけ。「あんな昔に比べたら今の方がまだましだ」(103)とローランドは考え、再び夕暮れの小暗い野原へと意識を戻す。

ローランドの行く手には更に壮絶なものが現れる。荒涼とした平原に「突如まるでヘビのように小川が現れて行く手を阻んだ」(109-110)。「小さいが悪意に満ち」(115)、「全ての物に害を及ぼす」(119)この川をローランドは、川底に横たわる「死人の顔に足を載せて進んで行」(122)かねばならない。「窪みを探して突き刺す槍に死人の髪や髭が絡まり、槍で突かれたネズミは赤ん坊の悲鳴のような声をあげる」(124-126)。小川を渡り終え岸に着いて安堵したのも束の間、今度は「毒を盛った溜池に放り込まれたヒキガエルか、まっ赤に熱せられた鉄の檻に入れられた野生の猫」(131-132)ならばかくやと思わせる、何者かが凄まじい苦闘を演じた後の、荒れに荒れた沼沢地が現れる。暫く行くと「人の体を巻き込んで平たく押し潰してしまう拷問台のような、まぐわ(harrow)」(141-142)が放置されており、次に現れるのは「切り株だらけの…全く回復の見込みがない、何の役にも立たぬ土地」(145-147)、「化膿して赤らんだ腫物」(151)のような地面の一角、そして「両端が引きちぎられて歪んだ死人の口を思わせる裂け目のある麻痺した樫の木」(154-155)であった。

遠くには黄昏の空が広がっているばかり。どちらに進むべきかと思案したその時、「悪鬼の仲間かと思うような大きな黒い鳥が兜を掠めて飛んで行き」（160-163）、目を上げれば、野原はぐるりを「地面が醜く盛り上がって堆積したもの」（166）とでも言うべき山々に取り囲まれていた。「山々の包囲から逃れる方法も解らず」（168）、ローランドは「悪辣な企みが身に降りかかり、旅はここで終わった」（170-171）ことを半ば悟る。その瞬間に「罨が閉まるカチッという音がし、洞穴の中に囚われた」（173-174）ことに気づくのだった。

「たちまち閃いたことがあった。これがその場所だ！」（175-176）「右手には、角突き合わせて戦う2匹の雄牛のように蹲る小山2つ。左手には高い禿山」（176-178）これらの山の間にあるのが、目指すあの暗黒の塔だ。それは「茶色い石で造られた、丸いずんぐりした、窓のない暗い小さな塔」（182-183）である。暮れかかった空に再び陽が射す。沈む前に「落日は、雲の裂け目から赤く燃えた。」（188）四方八方から弔いの鐘のように高まって聞こえてくるのは落命した仲間の名を告げる声である。「強かった者も勇敢だった者も幸運だった者も皆死んだ。多年の悲痛が弔いの鐘のように響いた。」（196-198）「死んだ仲間たちは山腹に一列に並んで（ローランドの）最期を眺めようとしている。さながら一枚の絵の生きた額縁だ。」（199-200）炎が広がる中、ローランドは怯むことなくラッパを口にすると「貴公子ローランドは暗黒の塔に来た」（204）と吹き鳴らすのであった。

作品解釈

David Masson が *The British Quarterly Review* (1856年1月) に *Men and Women* を論じた文章が *The Critical Heritage* に載っている。Masson はここで「貴公子ローランド」について“this poem deserves all in all to be regarded as the greatest thing in the volume” (Litzinger, 181) と評価している。*Men and Women* にはこれ以外にも

秀作が何篇も収められている。しかし、有名な批評家であり Milton の伝記をものしたことでも知られる碩学 Masson は、「貴公子ローランド」を「そのどれよりも優れている」と高く評価しているのである。「貴公子ローランド」には、華やかな情景は何一つ描かれない。戦いの場面もなければ美女とのロマンスもない。全篇が暮色に包まれて地味である。冴えない一日の暮れ方に、疲れた騎士が一人登場し、不気味な風景の中を行き悩みながら彷徨した末に、手柄一つ立てる訳でもなく最期を迎える。しかし、暗く殺伐とした雰囲気を読者の気を滅入らせるかというところと全くそうではなく、寧ろ重厚で深い味わいを醸し出している。黙々と前進し続けるローランドの克己心と剛直さは痛ましくも美しく、読む者の心を魅了する。『男と女』に収められた作品の中で、これ程までにおどましい舞台に、これ程まで孤独でストイックな主人公を登場させてその労苦のみを描きつつ、人の生き様について考えさせる厳粛な詩は他に無いのではないだろうか。Masson の高評価は尤もなことと頷けるのである。

さて、ブラウニング詩集、*21st-century Oxford Authors Robert Browning* の編者 R. Cronin と D. McMillan は、この作品の注で、ブラウニングがローランドを狂人として描いていると解説している (734)。この説に、ブラウニングが付けた断り書き、『リア王』の中のエドガーの歌を見よ」が絡んでいるのは明らかだ。この歌を口にした時のエドガーは狂人を装っていた。彼らの説を採って、この詩を狂人の心象風景の述懐と解釈すれば、非現実的でグロテスクな背景や奇怪な物の出現も辻褄が合う。また時間の経過の不自然さ、つまり、ローランドの遅々たる歩みは相当な時間を要している筈なのに、いつまで経っても夕暮れのままで夜にならないこと等も納得しやすい。狂人の心に浮かんで消えて行く目眩く幻覚であれば、黄昏という限られた時間内であっても全部がそこに収まるであろう。

また、ローランドを狂人と見た場合、遍歴の騎士を気取って冒険の旅に出かけ、風車を巨人と見なして大真面目に戦いを挑む等、行く先々で喜悲劇を

演じる変人の物語『ドン・キホーテ』(*Don Quixote*, 1605 & 1615)が自ずと想起される。ブラウニングについての年代記や研究書を読む限りでは、彼がこの頃、『ドン・キホーテ』を読んでいた形跡はない。だが有名な古典であるから彼の意識下にこの物語の記憶があって、それが引き金となって、一般的な華麗な騎士物語ではなく、乱心した騎士を主人公にして「貴公子ローランド」を書いたという可能性も考えられる。加えて、ブラウニング自身に正に「囚われの姫救出」と言っても良い武勇伝があった事を当然我々は思い出すのである。妻エリザベスの生家について Gilbert Keith Chesterton は、いみじくも “the house of a madman” (41) と喝破した。裕福で教養豊かではあったが、異常な独裁者として子供らを束縛する父親³に支配されていた「狂人の家」から、駆け落ちという思い切った方法でエリザベスを広い自由な世界へと解放したのはブラウニングであった。ブラウニングこそ手柄を立てて凱旋する天晴れな騎士さながらであった訳だが、この成功談を下敷きにして自画自賛の詩を書くのではなく、わざと捻りを入れて苦みを効かせた詩を書いたのだと推測することも出来る。

ただ、ローランドを「狂人」と考えた場合、ひっかかる場面がある。古き良き思い出を力にして怖気付いた自分に喝を入れようと考えたローランドは過去を回想するのだが、蘇って来たのは、親友に裏切られた嫌な記憶だけだった。ローランドは「こんな昔より今のこの状態の方がまだ」(103) と考える。この辺りの彼の堅強な反応は常人のそれであろう。過去ではなく現在を見据えるというスタンスこそ、この作品の、ひいては作者ブラウニングの真骨頂である。そのような大事な意味を含んだ台詞を狂人が口にするか、という疑問が残る。よって私は「貴公子ローランド」を、倦み疲れているが狂ってはいない、正気の騎士の独白と考えた。

「暗黒の塔」の正体をブラウニングは結局明らかにしない。騎士たちは、暗黒の塔を探し出さねばならぬ理由を示されぬまま、長い苦難の旅を続けて命を落としていく。この塔は、彼らにとっては騎士のプライドを懸けて見出

すべき大きな目標なのだが、結局は David V. Erdman が言うように“blind violence and brute force” (50) のシンボルでしかないのかもしれない。塔だけでなく塔を探し求める過程、すなわちローランドら騎士達が歩んだ道のりもまた、この塔から発せられる「盲目的な暴力と獐猛な力」に支配されていると言って良いだろう。理不尽な力に翻弄されながら辿る行程は、尋常のレベルを遥かに超えて過酷であり、長期に亘るストレスでローランドが如何に疲弊しているか、その度合いの凄まじさを示唆するブラウニングの筆致も注目に値する。

For, what with my whole world-wide wandering,
 What with my search drawn out thro' years, my hope
 Dwindled into a ghost not fit to cope
 With that obstreperous joy success would bring, ---
 I hardly tried now to rebuke the spring
 My heart made, finding failure in its scope. (19-24)⁴

ローランドの希望は、諸国を経巡る長い旅の間に「すっかり萎縮し、成功がもたらすであろう凶暴な喜びに拮抗できぬ」程にまで劣化していた。「失敗」という選択肢もあることに気づいて心ときめいた自分を「今はとても責める気にならない。」とローランドは言う。

Thus, I had so long suffered in this quest,
 Heard failure prophesied so oft, been writ
 So many times among “The Band” ---to wit,
 The knights who to the Dark Tower's search addressed
 Their steps---that just to fail as they, seemed best,
 And all the doubt was now---should I be fit. (37-42)

この試みが失敗に終わるのであることは、「探索団」に加わっていた時から

何度も耳にしていた。案の定、他の騎士らは失敗して姿を消した。そして今、疲れ切った彼は仲間と同じように自分も「失敗することが一番良いのだ」と考える。気がかりなのはただ一つ、「自分がこの失敗に相応しいかどうか」ということだけだ。

ローランドは死ぬ間際にやっと「暗黒の塔」を見つけた（と思った）が、それは醜い丘陵の間に建つ「茶色い石で造られた、丸いずんぐりした、窓のない暗い小さな塔」（182-183）であった。見映えのする壮麗な作りの高殿などではないことも又、興味深い。長く苦しい旅の終わりにローランドが見つけたと思った物は、こんなもさりした小塔だった。ここにブラウニングの、人間に対する確かで尚且つ温かい洞察を見ることが出来る。凡人が苦勞して一生を懸けて何かを得たとしても、往々にしてそれは傍目にはせいぜいこの程度の、冴えない物なのではないだろうか。だが他人にそれを侮る資格はないし、本人も卑下する必要はない。人生の集大成として誇って良いのである。だからブラウニングは詩の最後でローランドにラッパを吹かせ、堂々と「貴公子ローランが暗黒の塔に来た」（204）と名乗りを挙げさせたのである。

行く手を阻む厄介な障害物を主人公が一つ一つ片付けながら前進して行くこの詩の構図は、例えばスペンサー（Edmund Spenser, 1552-99）の『妖精の女王』（*The Faerie Queene*, 1589-99）や、バニヤン（John Bunyan, 1628-88）の『天路歷程』（*The Pilgrim's Progress*, 1678）の構図を思わせ、アレゴリーとして解釈したくもなる。しかしブラウニング本人はその様に読まれることを望んでいなかったようだ。石田憲次と石川林四郎による *Men and Women by Robert Browning Vol.1* の“Notes”には「Dr. Furnivall は三度 Browning にこの詩が Allegory であるかといふことを尋ねたところ、三度ながら“No”といふ答を得たと云ってある」（73）という説明がされている。作中の事象一つ一つを細かく何かの表象と解釈してその意味を探るのではなく、難しい課題に最後までチャレンジし続けた粘り強いローランドの姿を追いながら彼の思いに共感することを、ブラウニングは我々

読者に何よりも望んでいるのだ。

Roy E. Gridley は、ローランドは「解決ではなく人生と探求の終わりを求めている」(87) だけで、この詩の基調は“passive despair” (87) であると言う。確かにこのようなネガティブな解釈も可能である。しかし、例えそうであったとしても、ローランドは最後まで探索の旅を止めなかった。疲労困憊しながらも彼が必死で前進しようとする姿は私たちの心を打つ。そして、彼より遥かに凡庸で力の劣る者であるが、我々も又自らの経験をそれなりに敷衍して彼の行動に重ねることは出来る。作中の風景や、そこでのローランドの経験は現実離れしているが、そのシュールな背景から浮上してくる彼の大きな疲労感なり倦怠感なりは、読者にとって決して単なる絵空事ではなく、誰もが何がしかの具体的な経験に裏打ちされ、身につまされて理解し、共感できることであるだろう。

良質な生き方を求める謹厳な人間の一生とは畢竟、大なり小なりローランドの彷徨のようなものではないだろうか。各人が、自らに課した高い目標を持っていて、なぜそれを成就せねばならぬかを徹底的に分析して納得した訳ではなく、ただそうしなければならぬという強い義務感に促され、あるいは縛られて、しゃにむにその目標に向かって努力を続けて一生を終える。こんな不器用な生き方を冷笑することも可能だが、ブラウニングはそうせず、努力する人間のひたむきな姿を温かい共感の目でもって描いている。ブラウニングはローランドに何度も「失敗」という言葉を言わせ、自分を失敗者だと考えさせている。しかし詩の最後に至るまで、ローランドは、どれほど汚れて疲れていようと、ヒーローとして遜色に欠けることのない威厳に満ちた姿で描かれる。ブラウニングにとっては、成功か失敗かという結果は意味を持たず、大事なものは結果に至る過程であったからだと思う。失敗しても諦めずに挑戦しようとするタフな姿勢をブラウニングは尊いと考えた。怪物を征伐したり囚われの姫を救出したり、というような華やかな行為は一切なく、ただ歩いているだけのローランドも、ブラウニングの理想とする「強い男」な

のである。

パリの刺激

フローレンスに居を定めてから「貴公子ローランド」を書くまでの5年間、ブラウニングは寡作であったが、それは詩作にまで手が回らなかったからである。Peter Dally は次のように書いている。

It would have been remarkable had Robert written poetry during these early years of marriage. He alone was responsible for Elizabeth's happiness and health, and made her feel 'completely spoilt and happy'. He took charge of everything, including their finances. He entertained her, shared the same novels, took her for walks and expeditions, and revered her. He was, at different times, a husband, lover and nurse. Whenever unhappy or ill, she clung to him. (133)

エリザベスは病弱であったが、無茶を言う厄介な女ではなかった。彼女は人間性の点でも非常に魅力的であったようだ。Garrett の *Chronology* には、駈け落ち途中の一行にパリから加わったブラウニングの知人が彼女の人柄に魅せられたこと、特にその“selflessness, and powers of endurance” (74) が印象的で、故に彼らの結婚を心から祝福した旨記されている。ただ、いくらエリザベスが「無私無欲で忍耐強い」女性であったとしても、彼女は夫に専ら頼り切る存在でしかなかった。ブラウニングの精神的・肉体的負担の大きさが思いやられる。「夫・恋人・看護師」の三役をこなしながら遠い異国の地で日々の暮らしを無事に営んで行くのは生易しいことではない。フローレンスで暮らして3年目に、エリザベスが男児を出産した。喜ばしい出来事ではあったが、既に2度流産の経験があり、40歳を越えての高齢出産でもあり、ブラウニングの不安や心配も大きかった筈である。子どもの誕生で上記の三役に更に「父親」の役がプラスされて家長としての責任は一層重くなっ

た。しかも我が子の誕生とほぼ同時期に、ブラウニングの最愛の母が亡くなっている。ブラウニングは妹からの手紙でそれを知ったが、帰国する余裕はなかった。夏になると避暑地を求めてブラウニングは妻子を連れてイタリア国内を移動している。慌ただしい日々の雑務の中で、数か月かけてブラウニングは母を喪った悲しみを癒やすしかなかった。この時、ブラウニングは亡き母を悼んで *Christmas-Eve and Easter-Day A Poem* を書いてはいるのである。それを1850年に出版したが評判は良くなかった。生活運営の負担が殆どブラウニング一人の肩にかかっていたが故の不利が明白である。ブラウニングが自分の仕事に集中し難かったのは仕方ない事であった。

しかし1851年、駆け落ちから5年後、ブラウニングが妻子を伴って故国を訪れたことが彼に転機をもたらした。ロンドン・パリ滞在中にブラウニング夫妻は様々な文人と交流し、観劇などを楽しんだ。これらの経験によって知的活動は当然、活性化されたはずである。特に、8か月にわたるパリでの暮らしが“stimulating and exiting” (91) であったことを Jacob Korg は指摘する。ルイ・ナポレオン (Louis Napoleon Bonaparte, 1808-73) によるクーデター勃発時 (1851年12月2日) には、シャンゼリゼ通りに面した夫妻のアパルトマンの窓から軍隊の行進が見え、大砲の音も聞こえ、ブラウニングは自分たちが“the center of historic event” (91) にいることを痛感したのであった。

パリに比ベフローレンスは、まったりした雰囲気のある古都であった。Korg は当時のフローレンスを“a sleepy, superficial, slightly ridiculous suburb of nineteenth-century life” (92) と説明している。ただ、ブラウニング自身が多忙を口実に居直って、長閑な町で、ある意味気楽に5年を空費していた訳ではなかったと思う。Dally によると、「貴公子ローランド」をブラウニングが書いて久々に創作活動を再開した時、エリザベスは非常に喜んだと言う。彼女は、これを機にブラウニングの作品が売れて名声が広まることを願っていた。その裏には、自分たちの結婚を頑として認めようとし

ない父親にブラウニングの活躍を知らしめ、自分の「夫選びは間違っていないかった」(155)ことを示したいという思惑があったのだ。勿論、この5年間、賢明なエリザベスが露骨に夫を詰ったり急かしたりすることはなかったと思われるが、仲睦まじい夫婦であれば言葉にしなくても互いの気持ちは自ずと伝わる。妻の無言の期待は少なからぬプレッシャーとなってブラウニングの意識の片隅に常在していた筈である。

また、パリ滞在中に明らかとなった自分の父親が原因のスキャンダル(1952年に婚約不履行で相手の女性から訴えられた)は、ブラウニングにとって忌まわしい出来事であったに違いない。ブラウニングが困惑し恥じたことは既に述べた通りであるが、それは専らエリザベスの父に対してではなかったか。行い澄ました厳格なバレット氏の批判や軽蔑を予想し、この不面目の埋め合わせを自分がせねばとブラウニングは焦ったであろう。強まって行く焦燥感が彼の創作再開の原動力ともなったと考えられる。ともかく、この間にブラウニングが日々感じていた鬱屈は、疲れきったローランドの姿に幾分投影されているように思われる。

それともう一つ、当時の所謂「大改造」前の古いパリの街の有様もまた「貴公子ローランド」創作に資するところがあったのではないかと推測する。これについては Chesterton の説が手掛かりになった。Chesterton は「貴公子ローランド」は“the hint of an entirely new and curious type of poetry, the poetry of the shabby and hungry aspect of the earth itself” (81) であると言う。そして、動物が踏みにじり、枯らしてしまった萱や、頭がブチ切られたアザミの茎、黒ずんで穴が開きボロボロになったイタダリの葉等への言及部分(第12連)を引用して次のように述べる。

This is a perfect realization of that eerie sentiment which comes upon us, not so often among mountains and water-falls, as it does on some half-starved common at twilight, or in

walking down some grey mean street. It is the song of the beauty of refuse: and Browning was the first to sing it. (81)

1851年12月にクーデターを起こしたルイ・ナポレオンは、翌1852年11月にナポレオン3世として帝位についた。彼がセーヌ県知事オスマン (Georges-Eugène Haussmann, 1809-91) に命じてパリ大改造を開始するのが1853年6月である。鹿島茂の『19世紀パリ時間旅行』によると、ルイ・ナポレオンは「狭く曲がりくねった通りに古くて非衛生な建物がびっしり立ち並んだパリに強い嫌悪感」を覚え、政権奪取とともに「下層労働者の住む密集地域を取り壊して、幅の広い大通りを貫通させて空気の還流を良くしようと考えた」(133) ののだと言う。ただ、これより少し前から都市整備は徐々に進められており、『19世紀パリ時間旅行』には「家が容赦なく破壊され…翻弄される市民の様子」(146) をドーミエ (Honoré Daumier, 1808-79) が1852年に描いた風刺画が載っている。

ブラウニングは1852年の10月までパリに滞在したのであるから、大改造によって人工的な美しい都市に変身する前の古いパリの汚穢や混乱、即ち Chesterton が挙げている「夕暮れ時の佻しい公共広場」「陰気でみずぼらしい街路」「廃棄物」等を実際に目にすることもあった筈だ。フローレンスに戻ったブラウニングは、1853年1月に「貴公子ローランド」を書く時にパリ旧市街で目にした殺伐とした穢らしい情景を詩の中に活かしたのではないだろうか。Chesterton が指摘するように、これによってブラウニングが「この世の汚れや不毛の様を扱う新奇な」詩の創始者になったのだとしたら、これもまたパリから受けた刺激のお陰と言わねばならない。

強い男

「貴公子ローランド」執筆から8年を経た1861年、6月29日の未明にエリザベスは最愛の夫ブラウニングの腕の中で静かに息を引き取った。彼女の死

から約3ヶ月後、ブラウニングは「プロスピス」(“Prospice”)という小さな詩を書いている。Clyde De L. Ryals が指摘するように、この詩は“‘Child Roland to the Dark Tower Came’ transformed lyrically” (153)、すなわち「貴公子ローランド」の抒情詩版と言って良い。“Fear death?”という反語疑問で始まるこの詩には、死の恐怖や苦しみと対峙し、戦い抜こうとする「強い男」の理想像が描かれる。その姿は貴公子ローランドそのもの、いや、ローランドより遥かに意気軒昂である。

Where he stands, the Arch Fear in a visible form,
 Yet the strong man must go:
 For the journey is done and the summit attained,
 And the barriers fall,
 Though a battle's to fight ere the guerdon be gained
 The reward of it all. (7-12)

怖ろしい死を目前にしても「強い男は進まねばなら」ず、死を相手に「もう一戦交えなければならぬ」とブラウニングは考える。なぜなら堂々と戦い抜いてこそ「報酬」即ち、先に逝った妻エリザベスと再会、そして神の御許での安らぎが得られるからだ。更に続けてブラウニングは、

I would hate that death bandaged my eyes, and forbore
 And bade me creep past.
 No! let me taste the whole of it, fare like my peers
 The heroes of old,
 Bear the brunt, in a minute pay glad life's arrears
 Of pain, darkness and cold. (15-20)

「死神に目隠しをされ…這うようにして生死の境を擦り抜けて行く」のではなく「昔日の英雄たちと同様に自分も死の恐怖や苦しみを全て経験し、耐え

抜いて」あの世に行きたいと述べる。常に先達の騎士らの姿を思い、彼らと同じように最後まで耐え抜こうと考えていたローランドの姿が思い出される。

R. Cronin と D. McMillan の解説 (806) によると、“prospice” というラテン語は “Respice Prospice” という諺の形で頻出する表現で、全体の意味は “Learn from the past, look to the future” (過去から学び、将来を考えよ) である。この諺の後半を自分の詩のタイトルに用いたことは、懐古的になることを拒み、未来、特に死後の生に気持ちを集中させようとするブラウニングの姿勢を際立たせていると彼らは指摘している。ただ、この詩においてブラウニングが思いを馳せているのは、果たして来世 (= エリザベスとの再会) だけであろうか。彼の思念は、来世と同じく、いやそれ以上に、現世 (= 今後の自分の人生) にも向けられているように私には思えるのである。

ブラウニングは、最愛の妻を思い出すことすら辛くてまだ出来ず、せめて勇ましく戦う姿を想像することで自らを鼓舞して一切の感傷を排し、死後の世界に希望を託すことによって目下の哀しみに打ち負かされまいとしているようにも見える。だが同時に、“Respice” という言葉をバツサリ切り捨てたところに私はブラウニングの思い切りの良さを感じる。エリザベスは死んだ。どれ程嘆いても生き返る訳ではない。彼女とは来世で再会できるであろうが、それはまだ先のことだ。その前に自分の中年期と老年期が控えている。そこをどう生きるかをブラウニングは考えた筈である。妻亡き後の自分の人生への思いもこの詩から透けて見えるように思われる。

Ryals によれば、ブラウニングは妻を亡くした後、“I want my new life to resemble the last fifteen years as little as possible.” (141) と述べたそうである。「これまでの15年とは全く違う新しい人生を送りたい」という言葉に、最良の夫であったからこそその15年にわたる彼の疲れが滲み出ている。哀しみは大きかったに違いないが、自分は妻に十分に尽くしたという自負もブラウニングにはあったと思う。エリザベスの死という最悪の事態

が起きてしまった以上、彼女を気遣い、看病する必要もなくなった。これからは時間を全て自分の為に使えるのだと思いついた時には、何がしかの興奮を覚えた筈であるし、その貴重な時間を無駄に浪費すまいと気を引き締めもしたであろう。ただ、この時期にそれを正直に書いてしまうことは流石に憚られ、よって「プロスピス」では、自分の死に際とその先にある筈のエリザベスとの再会にのみ言辞を限ったのではないかと思う。

1861年7月1日にエリザベスの亡骸をフローレンスのプロテスタント墓地に埋葬した後、ブラウニングは一人息子と共にイギリスに戻り、ロンドンで第二の人生を開始した。Ryalsによれば“Browning was too sociable to remain long solitary.” (143) とのことで、翌年の春までに、午前中は家で執筆・午後からは外出（文芸クラブ等で食事や読書）という彼独自のライフ・スタイルが出来て行ったようである。ブラウニングは15年の空白をもものともせず、すぐにロンドンでの暮らしに順応した。水を得た魚のように仕事に精出し、社交も楽しんで人生を謳歌している感があるが、それは決して彼が亡き妻に対して薄情であることを意味しない。徒に懐古趣味に陥っていないだけである。再び Dally の説明を引用してみよう。

Grief takes many forms. Robert dealt with his by containing the memories of Elizabeth, the pleasures and pains of their intense relationship, in the depths of the mind. He could not forget but he could distance feeling. (197)

エリザベスの思い出を「心の奥底に封じ込める」という方法で、ブラウニングは喪失の哀しみを乗り越えた。彼は「妻への思いを忘れることは出来なかったが、それから距離を置くことは出来た」のだ。この後に続けて Dally は「彼はエリザベス没後28年間を、あたかも彼女が存在するかのごとく、再婚から守られて（“protected from remarriage”）生きた」（197）と書いている。妻亡き後もブラウニングの人生が充実していたのは、彼が諸々の感情をうま

くコントロール出来たからであろう。考えても詮方ない哀しみは“distance” (197) しようとするブラウニングの強い意志や理性が働いていたのである。逆に、エリザベスとの楽しい思い出もたくさんあって、それらは正に「貴公子ローランド」の中で言及された「戦いの前の一杯のワイン」(86)のごとく、気が滅入りかけたブラウニングを元気づけてくれたのであろう。エリザベスは彼の記憶の中に最後まで君臨していた。彼女に先立たれた時ブラウニングはまだ49歳であった。彼は中年になってもハンサムで女性にもてたし⁵、“too sociable” (Ryals, 143) な性格でもあったのに再婚はせず、色恋沙汰もなかった。ブラウニングの心の奥の至聖所にエリザベスは祀られて彼を「護って」いたのである。

ブラウニングは、1889年12月12日に77歳でこの世を去った。亡くなる少し前に書いたのが小詩「エピローグ」(“Epilogue”)である。ここでも彼は強い男であることを強調し、自分は「怠け者」(the slothful)や「泣き虫」(the mawkish)、「臆病者」(the unmanly)とは無関係であり、「目的も希望もない無力な連中のように」(Like the aimless, helpless, hopeless)、「くどくどしく愚痴をこぼす」(drivel)ことは一度もなかったと念押しする(8-10)。そして自分という人間を総括して

One who never turned his back but marched forward,
 Never doubted clouds would break,
 Never dreamed, though right were worsted, wrong would
 triumph,
 Held we fall to rise, are baffled to fight better,
 Sleep to wake. (11-15)

「後ろを向かず前進し／雲は必ず晴れると信じ、／正義が負けても悪が勝利するとは夢想だにせず／倒れるのは起き上がるため、悩むのはより良く戦うため／眠るのは目覚めるためと考えていた者」だと言う。

諦めずに前進し続けた貴公子ローランドの姿がまた蘇ってくる。ただ、夕暮れの荒野で疲労困憊していたローランドとは全く違い、77年の生涯を生きたブラウニングの魂は元気そのもので、“at noonday in the bustle of man’s work-time/Greet the unseen with a cheer!” (16-17) と述べ、“cry ‘Speed, ---fight on, fare ever/There as here!’” (19-20) という要求で詩を締めくくる。賑やかな昼間の都会を浮遊するブラウニングの魂は、知人友人に対して自分に喝を入れてくれ、「あっちでも、こっちと同様に頑張れ、戦いをやめるな、どんどん前へ進め！」と檄を飛ばしてくれと願うのである。ブラウニングは死んでも尚、生き生きとして覇気に満ちている。「安らかにお眠り下さい」などと言おうものなら「バカにするな！」と墓石を蹴り上げて飛び出して来そうな勢いである。

「貴公子ローランド」から浮かんで来るのは、蕭条たる夕暮れの風景の中を、時々身構えて厳しい顔つきで遠くを望み見るが、大抵は項垂れて跛行するやつれた古武士の姿である。「貴公子ローランド」執筆時の41歳のブラウニングには、様々な試練に屈せず強い男として生きてゆくことが、このような姿でイメージされていたのであろう。それから36年を経て77才まで生きた老詩人は「エピローグ」を書いて自らの人生を振り返り、更に死後の自分を想像したのだが、その時にイメージされたのは、元気で明るく、ユーモアさえ感じさせる強い男の姿であった。薄暗がりの中で俯いて難渋などしていない。日盛りの街の通りを、迷いも曇りもないキツとした表情で背筋を伸ばし、真つすぐ前を見て闊歩しているのである。自分の人生を丸ごと肯定できたからこそその晴れ晴れとした姿なのであり、これをもってしても彼が誠に幸せな一生を送った詩人であったことが解る。生まれ持って知力、体力、経済力全てに恵まれた⁶という利点もあるが、だからと言って無条件に誰でもが彼の様になれる訳ではない。この幸せな充実した人生は、「強い男」⁷ブラウニングが、優れた理性と豊かな感性を資源にして努力を続けた結果であることも忘れてはならないと思う。

注

- 1 実際に桂冠詩人に選ばれたのはテニスン (Alfred Tennyson, 1809-92) であった。
- 2 エドガーのこの台詞は『リア王』3幕4場176行目。
- 3 エリザベスの父親は極めて保守的な家長であって、家族を愛してはいたが、その愛情は Chesterton が指摘するように “selfishness of the most perilous sort” (31) で裏打ちされていた。彼は家族に絶対服従を強いる強大な専制君主であったが、剛毅さには欠けていたようで、Chesterton によると “when the cloud was upon his spirit, he would lash out at all things and every one with the insatiable cruelty of the sentimentalist” (31) とのことである。ブラウニングとは全く逆の性格であった。
- 4 作品は全て Richard Cronin と Dorothy McMillan の編集による詩集 *21st-century Oxford Authors Robert Browning* (2015) から引用した。「貴公子ローランド」からの引用については、スタンザではなく行をカッコ内に示した。
- 5 Dally によると、晩年のエリザベスは手紙に夫のことを「彼は私みたいに痩せてもいないしやつれてもありません。何処へ行っても女たちが、はしたない程に彼に夢中になります。彼は私が最初に会った時よりもっとハンサムで魅力的です」(193) と書いている。
- 6 ブラウニング家は代々地主の家系で、父親はイングランド銀行に勤務。文学、芸術、語学に造詣の深い学者タイプで蔵書は「6000冊以上」(Ryals, 2) に上っていたと言う。健康にも恵まれ、その体質は息子のブラウニングにも引き継がれて、彼は亡くなるまで病気知らずであった。ブラウニングの父親は仲睦まじい家庭を築き、息子の教育にも熱心であった。ブラウニングは所謂、パブリックスクールから名門大学へというコースを辿らず、専ら父の蔵書を読み漁って教養を身につけた。
- 7 改めて言うことでもないが「強い」とは、男っぽさの誇示を意味しない。優れた理性、強い意志、度量の深さ、落ち着き、優しさ等々を併せ持つ人が「強い」のである。例えば1849年から50年にかけてブラウニング夫妻にはかなりの不均衡があった。母親となり、恋愛ソネット集を出版し、桂冠詩人の候補にもなったエリザベスの充実ぶりに比べ、ブラウニングにはこれといった業績はない。大恋愛の末に結婚した夫婦でも普通ならばこの辺りで悶着が起きるだろう。妻の為に本業に打ち込めない夫が、夫にケアされ順調に仕事が運んでいる妻の幸せを我が事として素直に喜ぶことは難しい。焦りや苛立ち、恨み、嫉妬等の負の感情が増幅し、それが夫婦仲の破綻へと繋がって行くケースは多い。ところがブラウニングの家では、夫婦の諍いがあったり夫が荒れたりした形跡はない。エリザベスへの敬愛の念がそれ程強かったということでもあるが、結婚後、身に降りかかってくる全

てを自らの責任に於いて黙って受け入れてゆく強靱な精神がブラウニングには備わっていたからであろう。ブラウニングは情熱的で愛情深いだけではなく、非常に忍耐強く理性的でもあったということだ。これ一つとってみても、ブラウニングは決して、ただの楽天的で能天気な男ではなかったと解る。

引用文献

- Bloom, Harold. *Bloom's Major Poets Robert Browning*. Broomall: Chelsea House Publishers, 2000.
- Chesterton, Gilbert Keith. *Robert Browning*. Teddington: The Echo Press, 2006.
- Cronin, Richard & McMillan, Dorothy (ed.) *21st-century Oxford Authors Robert Browning*. Oxford: Oxford University press, 2015.
- Dally, Peter. *Elizabeth Barrett Browning A Psychological Portrait*. London: Macmillan, 1989.
- Erdman, David V. "Browning's Industrial Nightmare." *Blooms Major Poets Robert Browning* (2001): 49-51.
- Garrett, Martin. *Browning Chronology Elizabeth Barrett and Robert Browning*. London: Macmillan, 2000.
- Ishida, Kenji & Ishikawa, Rinshiro (introduction and notes). *Men and Women* vol I. Tokyo: Kenkyusha, 1951.
- 鹿島茂『19世紀パリ時間旅行—失われた街を求めて—』京都：青幻舎 2017年
- Korg, Jacob. *Browning and Italy*. Athens: Ohio University. Press, 1983.
- Litzinger, Boyd & Smalley, Donald (ed). *Robert Browning the Critical Heritage*. London: Routledge, 1968.
- Milward, Peter (introduction and notes), *King Lear*, Tokyo Taishukan, 1987.
- Ryals, Clyde De L. *The Life of Robert Browning A Critical Biography*, Oxford: Blackwell, 1993.